

シモン・ヴーエ作《聖エウスタキウスとその家族の殉教》
—様式上の靈感源の問題を中心に—

伊藤里華（東京藝術大学）

17世紀前半、ルイ13世の治世下で活躍したフランス人画家シモン・ヴーエ（1590-1649）は、1627年から1640年まで国王付首席画家として宮廷や聖堂の装飾に携わった。彼はパリで多くの祭壇画を制作したが、その多くはフランス革命期に消失した。しかし、現存する貴重な作例の一つとして、1635年に制作されたサン＝トゥスタシュ聖堂の主祭壇画が知られている。

この主祭壇は国王付建築家のジャック・ルメルシエ（1585-1654）によって設計され、1776年まで使用されたが、その後祭壇の改修により解体された。本来は、上下に絵画が配置され彫刻がその周囲を取り囲む、ファサードの形式を模したフロンティスピース形式が採用されており、下部には《聖エウスタキウスとその家族の殉教》（1635年、サン＝トゥスタシュ聖堂に現存）、上部には《聖エウスタキウスとその家族の昇天》（1635年、現在はナント美術館に所蔵）が設置されていた。

これらの二つの絵画については注文主の同定に関する議論が20世紀に活発に行われてきた（1927, CHARAGEAT ; 1962, CRELLY ; 1965, PICART）。一方で、聖エウスタキウスを主題とする先行作品が少ないことから、図像学的考察はほとんど行われてこなかった。ルイ・レオによる図像学事典によれば「聖エウスタキウスと家族の昇天場面」を描いた作例はヴーエの作品のみとされている（1958, RÉAU）。したがって、ヴーエが他の聖人の殉教場面を主題とする先行作例を参照した可能性を考慮せねばならない。

本発表では、下段の《聖エウスタキウスとその家族の殉教》に焦点を当て、彼がパオロ・ヴェロネーゼ（1528-1588）作《聖ゲオルギウスの殉教》（1566年、ヴェローナ、サン・ジョルジョ・イン・ブライダ聖堂）を参照して作品を構想した可能性が高いことを指摘したい。イタリア時代のヴーエがヴェローナを訪れた記録は知られていないが、ヴーエに近い版画家であったピエール・ブレビット（1598-1642）による複製版画を介してヴェロネーゼの構図を研究した可能性も考慮する。

ヴーエの作品全般において、ヴェロネーゼの絵画様式の影響が顕著に表れていることは、シャルル・ブランの言及をはじめとして、1990年にヴーエの大回顧展のカタログを執筆したジャック・テュイリエに至るまで、多くの研究者によって指摘されている（1862, BLANC ; 1990, THUILLIER）。にもかかわらず、特定のヴェロネーゼ作品を参照した例はこれまでほとんど議論されていない。本発表では、ヴェロネーゼの様式に対するヴーエの関心を具体的に示すとともに、その後のフランスの美術理論におけるヴェロネーゼへの注目に先駆ける事例として考察してみたい。